



アフリカではどれくらいおコメが食べられているの?

日本人にとって、毎日の食事に欠かせないおコメ。海を越えて、はるか遠いアフリカの国々でも、主食として食されているのをご存じだろうか?最近のアフリカのコメ事情とJICAのアフリカ稲作支援について聞いた。



(上)ベナンの試験圃場で稲の生育について説明をする惣慶嘉専門家
(左)セネガルの代表料理「チェブジェン」(撮影:今村健志朗)

JICA農村開発部
乾燥畑作地帯第二課

徳田 進平

PROFILE

1999年JICAに就職。大阪国際センター、アフリカ部、モロッコ事務所を経て、2007年9月より現職。



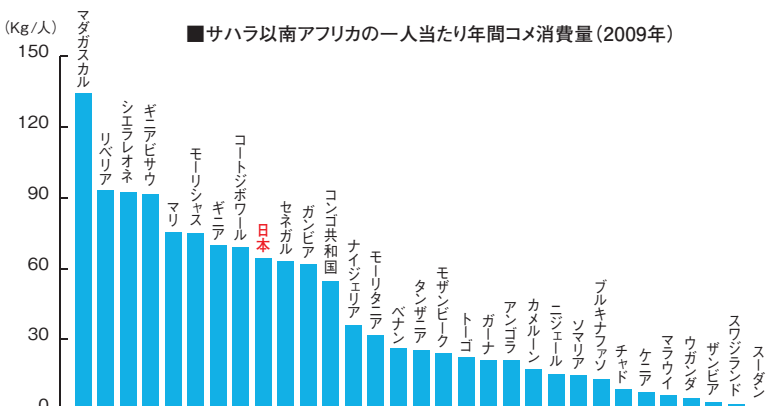
「アフリカのコメ生産倍増を目指し、包括的な支援を行っています」

地域別で見ると、西アフリカでは、コメを食べる習慣が古くから定着していました。特に、セネガルの代表的料理「チェブジェン」というトマト味の炊き込みごはんは有名です。一方、東アフリカでは、トウモロコシ、ジャガイモ、キャッサバなど、主食は実にバラエティーに富んでいます。近年は都市化に伴い、コメの消費量が急増してきています。

このような中、アフリカ全土ではコメの需要と供給のバランスが崩れ、増加する需要に供給が追いついていない状況です。現在アフリカの1ヘクタール当たりの収量はアジアのわずか半分。圃場の均平化や正条植え、除草など、コメの栽培管理技術を工夫すれば、生産拡大の可能性は十分にあると考えられます。

A コメ」といって、日本はもちろん、アジアで多く食べられているイメージがありますが、実はアフリカでもコメを主食とする国がたくさんあります。一人当たりのコメ消費量で見ると、マダガスカル、シエラレオネ、マリ、ギニア、コートジボワールなどは、日本より高い数値を記録しています。

中でもマダガスカルは、アフリカのみならず、世界で見ても有数のコメの消費国であり(一人当たりコメ消費量135キロ)、自給率も90%に達しています。10〜12世紀ごろ、インドネシア系の人々などによって島に稲作がもたらされ、その後16世紀までにはほぼ全土に普及されたといわれています。



そこでJICAがかじを取り、2008年5月の第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)で発表されたのが「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」イニシアチブ。JICAを含む11の援助機関が連携し、今後10年間で、サハラ以南アフリカのコメ生産量の倍増(1400万トンから2800万トン)を最終目標に、包括的な支援を行っていくというものです。

昨今の食料価格の高騰で、アフリカの貧困層はより厳しい生活を強いられています。CARDの取り組みは、食料を取り巻くさまざまな問題の解決につながると信じています。